

アン・エリオットは本当に説得されたのか？ —ジェイン・オースティンの『説得』における ヒロインの心理的自立の獲得について—

門 田 守 奈良教育大学英語教育講座 (英米文学)

Was Anne Elliot Truly Persuaded?: On the Heroine's Psychological Independence in Jane Austen's *Persuasion*

Mamoru KADOTA

(Department of English, Nara University of Education)

Abstract

This essay on Jane Austen's *Persuasion* examines how Anne Elliot overcomes the authority of Lady Russell who opposes her marriage to Captain Wentworth. As a baronet's daughter, Anne must pay respect to the counsel of Lady Russell, who incidentally performs the role of the heroine's dead mother and represents the established order of the landed gentry. The class-based prejudice which supports Anne's conformity to Lady Russell's conservatism gradually lessens its grip on the heroine's mind as she gains a wide variety of experiences at Uppercross, Lyme Regis, and Bath. Uppercross proves to be the place where Anne senses the moral emptiness of the Musgroves as well as the captain's unaffected sincerity towards her. Lyme Regis drives home to Anne the blind forces of chance when Mr. Elliot takes a fancy to her, and Louisa Musgrove receives severe injuries at the Cobb. Bath brings the grosser aspects of the Elliots to the surface when they begin to lead a gay life in the din and bustle of the city. The chance-driven story line allows Anne to meet Mrs. Smith, who exposes Mr. Elliot's true identity and illustrates the helplessness of a lower-class widow. As Mr. Elliot's desire for wealth is brought to light, Lady Russell admits that she has made a series of mistakes in choosing Anne's partner. Despite the loss of Lady Russell's authority, Anne still feels reverence for her mentor and remains on friendly terms with her upper-class friends. The heroine finally attains her psychological independence when she overcomes her class-consciousness and accepts the forces of chance which may change the course of her life.

Key Words: Anne Elliot, Jane Austen, *Persuasion*, heroine, psychological independence,

キーワード: アン・エリオット, ジェイン・オースティン, 『説得』, ヒロイン, 心理的自立

1. はじめに

ジェイン・オースティン (Jane Austen) の『説得 (*Persuasion*, 1818) は、ヒロインのアン・エリオット (Anne Elliot) が8年半の長きにわたる婚約解消期間の末に、かつての恋人フレデリック・ウェントワース大佐 (Captain Frederick Wentworth) と結ばれる物語である。彼女が一度別れた恋人との愛を蘇らせるのには、さまざまな事情が絡んでいる。しかしながら、最も強い影

響力を揮ったのは、彼女に対するラッセル令夫人 (Lady Russell) による説得であると思われる。この説得は呪縛となり、小説全体にわたってヒロインの生き方を拘束していく。彼女の成長には、内面においてこの説得をどう乗り越えていくかが問題なのだ。⁽¹⁾

ラッセル令夫人による説得は、アンの故郷である英国南西部、サマセットシャー (Somersetshire) のケリンチ館 (Kellynch-hall) を中心に行われる。アンはウェントワース大佐と一度は婚約を交わしたが、数ヶ月後に

はそれを取消している。そのときアンは19歳で、大佐は23歳だった。アンにとっての善き友人で、人生の指導者たるラッセル令夫人には、この結婚は早すぎるし、相手の男の将来も不確かに思われた。アンの素直さも手伝って、彼女は従順にもラッセル令夫人の忠告を受け入れ、あっさり婚約解消に同意してしまう。⁽²⁾

この事件には、単なる素直な娘による善良な忠告者の意見への盲従として済ましてしまうわけにはいかない、さまざまな事情が絡んでいる。ラッセル令夫人は実はアンの母親エリザベス・ステイーヴンソン (Elizabeth Stevenson) の親友で、相談役でもあったのだ。アンの母親が既にこの世を去っていることを考え合わせれば、アンは亡き母の代理役たるラッセル令夫人に、人生の選択に関して意見を乞うていることになる。母親的人物の見解、理解力、知恵に頼ってしまうことは、いわば自身をいつまでもただの頼りなき娘の位置に置いてしまうことになる。自身の判断力を行使する必要性を免れることは、アンが独立した女性として成長することの阻害要因として作用する。このことは、ラッセル令夫人の説得がヒロインの家族関係に影響力を及ぼす可能性を示している。

ラッセル令夫人の説得は、アンをめぐる社会的諸関係をも規定する影響力を持つ。すなわち、上流階級の倫理観に照らして、将来の危うい若い軍人との縁組みは避けるべきなのだ。まだまだ若い身空のアンには、もっと良い相手の登場を待つ余裕がある。准男爵のサー・ウォルター・エリオット (Sir Walter Elliot) を父に持つアンである。社会的諸関係に照らしてみれば、やはり同等の地位と資産のある男と結婚することが彼女には相応しい。⁽³⁾ 海軍大佐との縁組みは、やはり避けるべきだと言わざるを得ない。准男爵は貴族ではないとはいえ、それ相当に重んじるべき身分なのだ。アンに相応しいのは、たとえばケリンチ館に近いアップークロス (Uppercross) の土地財産を相続することが約束されている、若い男チャールズ・マスグローヴ (Charles Musgrove) であった。実際、チャールズはアンが22歳のときに求婚しているが、彼女はウェントワース大佐への思いが強かったのか、この申し出を断っている。ともあれ、ラッセル令夫人の干渉は、ヒロインを適切な社会的諸関係に組み入れる働きをなしている。

ラッセル令夫人の忠告は、アンに対しさらなる影響をもたらす。彼女の内面の有り様そのものを規定し、縛り上げてしまう効果を生んでしまうのだ。20歳前後の若いヒロインが選択すべき相手を外面的諸条件に照らして決定してしまうならば、彼女は最も安全で、最も体裁の良い男に嫁ぐことになる。既定路線に沿った生き方をし、最もミスが少なく、最も幸せになりそうな確率の高い相手が彼女にあてがわれる。これでは彼女を、人生を

左右する偶然の力に対して閉じられた存在にしてしまう。

偶然とは、この小説の後半において大きな力を揮う要素であると言わざるを得ない。すなわち、アンは小説の後半で、英国南西部の保養地、ライム・リージス (Lyme Regis) への旅とバース (Bath) への移住を経験する。前者において、妹メアリ (Mary) の嫁ぎ先、マスグローヴ家 (the Musgroves) の次女ルーザ (Louisa) を忌まわしい事故が襲う。逆バンク状態をなしたコップ (the Cobb) と呼ばれる防波堤からの飛び降りに失敗し、ルーザは意識不明の状態に陥ってしまう。アンは彼女の手当てをめぐり、大活躍をせざるを得ない。また、偶然にもライム・リージスでは、父親サー・ウォルターの甥、ウィリアム・エリオット氏 (Mr. William Elliot) に出くわしてしまう。運が悪いことに、この跡継ぎ男はアンを見初めてしまうのだ。ラッセル令夫人は、このエリオット氏はアンの相手として相応しいと言う。さて、ラッセル令夫人の言葉を信じてエリオット氏を受け入れていいものか、アンは大いに悩まざるを得ない。

最大の偶然の力は、バースで出会うスミス夫人 (Mrs. Smith) の告白ではないだろうか。この女性は一安のかつての同級生であった。彼女はエリオット氏に騙されて、零落の身に転落させられたことを切々と説き明かす。エリオット氏を勧めるラッセル令夫人の言葉は、まったく当てにならないことがわかってしまう。エリオット氏は確かに裕福で、男ぶりも良い。しかしながら、皮剥けば、どうしようもないほど卑劣な守銭奴なのだ。ラッセル令夫人は、物事の表面しか見ていないことが明白となる。アンは自分の判断力に頼って生きなければならないことに気づく。幸福への蓋然性に支えられたラッセル令夫人の忠告は、人生にいつなんどき襲いかかるかもしれぬ偶然の力に對しまったく無力なのだ。⁽⁴⁾

しかしながら、アンはラッセル令夫人の説得を否定すべきなのだろうか。アンはあくまで准男爵の娘、しかもとびきり優秀な娘である。上流階級に属する、礼儀正しき娘として、彼女は無碍に令夫人の心優しき教諭しを無視できるはずがない。では、彼女はこの善意に満ちた説得にどう対処すればいいのだろうか。彼女は母の代理者の助言、社会的諸関係への屈従、偶然の揮う猛威、これらの一切をまとめて受け入れざるを得ないのではないだろうか。これらのどれ一つして、逃れ去ることの許されない事情だからである。こうした中で、アン・エリオットという賢き女性は一安はラッセル令夫人によって本当に説得されたと言えるのだろうか、考察を深めてみたい。議論の流れとして、基本的にヒロインの動きを追って、彼女のケリンチ、アップークロス、ライム・リージス、バースにおける生活に焦点を当てていくこととしたい。彼女の成長は地理的移動に沿って、読者に提示されているか

らである。

2. ケリンチ館は虚栄と愚鈍に満ちた屋敷

アンの生家ケリンチ館は虚栄によって塗り固められた屋敷である。当主サー・ウォルターのほとんど唯一の趣味は、准男爵名簿 (the Baronetage) を覗き込むことだった。彼が決まって目に留める部分は、ケリンチ館の我がエリオット家に関する、以下の記述箇所だった。

“Walter Elliot, born March 1, 1760, married, July 15, 1784, Elizabeth, daughter of James Stevenson, Esq. of South Park, in the county of Gloucester; by which lady (who died 1801) he has issue Elizabeth, born June 1, 1785; Anne, born August 9, 1787; a still-born son, Nov. 5, 1789; Mary, born Nov. 20, 1791.” (9)

これへの補足として、メアリの誕生日に続けて、サー・ウォルターは律儀に手書きで下記の文面を追加していた。

— “married, Dec. 16, 1810, Charles, son and heir of Charles Musgrove, Esq. of Uppercross, in the county of Somerset,” ... (9)

このように、彼は身分や体面を重んじる、虚栄心で満ちた男だった。彼は他人に自分がどう映るかに異常な関心を持ち、54歳になっても自分の美貌と身分をいつも鼻にかけていた。

ところが、面白いことに、この男を付け狙うクレイ夫人 (Mrs. Clay) という人物がいる。この女性の父親はシェパード氏 (Mr. Shepherd) といい、弁護士でエリオット家の財務管理を担当している。夫を亡くして、貧乏暮らしをしなければならない美人のクレイ夫人は、なんとかサー・ウォルターとの再婚を目論んでいる。ところが、サー・ウォルターは常に相手に美貌と地位を求めており、いわば華麗なる男女からなる上流階級との交際こそが彼の夢なのだ。いかにクレイ夫人が頑張っても、サー・ウォルターが靡いてこないのは、オースティンの風俗作家としての面目躍如たる部分であると言えよう。サー・ウォルターの俗物ぶりこそが、それが人間的に見て欠点であるにもかかわらず、彼の身を守るという喜劇的側面もここには含まれているからである。

サー・ウォルターには三人の娘がいる。長女のエリザベス (Elizabeth) 29歳、次女のアン27歳 (小説の途中で28歳となる)、末娘のメアリ23歳である。⁽⁵⁾ エリザベスは父親似の虚栄心の塊である。ずっと独身のままでいる彼女はケリンチ館の女主人たる風情である。しかし、見映えとしては父親に劣る上に、徐々に女としての生き生きとした魅力を失いつつある。彼女を失恋させたのが、例のウィリアム・エリオット氏である。彼は推定相続人として、いずれはエリオット家の財産を独り占めできる

立場にある。しかし、彼はそれでも物足りず、より多くの資産を求めてエリザベスを捨て、金持ちの女と結婚する。この忌まわしい思い出を胸に秘め、エリザベスは父親同様、准男爵の家系を鼻にかけた虚栄の権化となっていく。

その虚栄につけ込むのがクレイ夫人であることが、父親とこの長女との類縁性を証している。ラッセル令夫人はクレイ夫人の人に取り入る手練手管や才気煥発ぶりを嫌っており、エリザベスに気をつけるように言っている。それにもかかわらず、エリザベスはその虚栄のゆえにクレイ夫人の良いお仲間になってしまう。ケリンチ館の長女は、このように簡単にクレイ夫人に取り込まれてしまうのだ。

She [Mrs. Clay] was a clever young woman, who understood the art of pleasing; the art of pleasing, at least, at Kellynch-hall; and who had made herself so acceptable to Miss Elliot, as to have been already staying there more than once, in spite of all that Lady Russell, who thought it a friendship quite out of place, could hint of caution and reserve. (19)

父親が体面を重んじるあまりに、クレイ夫人を遠ざけるのに対し、長女には単に甘い言葉をかけられるだけで相手を受け入れてしまう愚鈍さもあった。

ケリンチ館に漲る虚栄とは唯一無縁なのが、次女のアンである。しかし、彼女にしても問題がないわけではない。アンには虚栄はなくても、ある心理的な弱さがあった。⁽⁶⁾ アンはとても美しい女だったが、もう若さの坂道を下りつつある。彼女と親しかったのが、ラッセル令夫人である。ラッセル令夫人は独身だが、大金持ちで結婚する必要がない。この令夫人の影響もあり、アンは自然と結婚には無頓着になっていく。ラッセル令夫人、すなわち志操堅固だった母親の代理者は、アンを三姉妹の中で最も道徳的で優れた女性に育てていく。しかしながら、この老齢の女性との交流は、アンに予期せぬ災いをもたらすのではないだろうか。なぜならば、令夫人はアンを上流階級の倫理や常識によく通じさせたが、その反面として彼女をいつも令夫人の意見を求めたがる、心理的に独立していない女性にってしまうからである。この心理的束縛は、小説のほとんど全般にわたって続く。小説の後半でスミス夫人と邂逅し、アンはエリオット氏の悪辣ぶりを聞かされる。そのときでさえ、自分で判断するよりも、アンは令夫人の意見をまずは求めるのだ。この心理的弱さとも呼ぶべき、指導者への依存性こそが、アンが克服すべき問題である。ともあれ、アンは心理的脆弱性を持つとはいえ、エリオット家において唯一の倫理的な女性であった。

アンの心理的依存性は、よく言えば上流階級の娘としての聞き分けの良さとも呼べる。この聞き分けの良さが

発揮されたのが、ウェントワース大佐との婚約解消の一件である。アンは19歳でウェントワース大佐からの求婚を受ける。彼女も彼が好きだったから、いったんは素直に求婚を受け入れてしまう。しかしながら、ラッセル令夫人は彼らの若さと身分差を考え、その結婚に反対する。大佐は23歳で、将来はまだ不安定なのだ。アンは素直な良い娘として、婚約解消に同意してしまう。彼女は自分の思いを押し殺して、上流階級の娘として求められる倫理的判断の枠組みに従ったのである。外側にある基準に従って行動することは安全を保証するが、結局は自己を満足させることはない。アンには虚栄はなくても、情緒的に自分を常に抑えていようとする態度がある。彼女には、誰かが何か自分に良いことをしてくれるのを待っていればよいといった姿勢があるのだ。これは心理的自立が獲得されていない状態と言えるだろう。

聞き分けの良いヒロインの育成に貢献した、当のラッセル令夫人について、オースティンはこんなふうと言っている。

She had a cultivated mind, and was, generally speaking, rational and consistent—but she had prejudices on the side of ancestry; she had a value for rank and consequence, which blinded her a little to the faults of those who possessed them. Herself, the widow of only a knight, she gave the dignity of a baronet all its due; ... (15)

ラッセル令夫人の判断力はけっして完全なものではなく、どんな場合でも当てにしていられる種類のものでもない。ケリンチ館の欠点に絡めながら、オースティンは令夫人の階級に関する考え方につきまとう盲点をも突いている。令夫人は勲爵士の未亡人だから、准男爵には頭が上がないのだ。ということは、令夫人はアン教育にも階級的観点を持ち込んでいることになる。

このことを考え合わせれば、アンに突きつけられているのは、階級に相応しい行動を取るか、あるいは自分の自由な思いを取るかという問題ではなかろうか。その選択には、当然のことながら、自身の階級に対する価値観が絡んでくるであろう。自身の階級にいかほどの価値があるのか—彼女のこの問題に対する判断については小説の進展を追って考察しなければならない。今のところは、彼女の抱える問題の淵源に階級意識があることを指摘しておこう。

末娘のメアリも虚栄に満ちた女である。彼女はアンが見限ったマスグローヴ家の長男チャールズ (Charles) と結婚し、少しだけ偉そうになってしまう。

Mary had acquired a little artificial importance, by becoming Mrs. Charles Musgrove; ... (11)

しかし、オースティンはすかさず、メアリが単純に相手に資産があるだけで結婚したことをほのめかす。

Mary had merely connected herself with an old country family of respectability and large fortune, ... (11)

彼女にはチャールズとウォルターという子供ができるが、さして彼らを愛しているわけではない。うるさいのが嫌で、家政婦のジェマイマ (Jemima) に預けきっている。夫と言えば、狩猟と猟銃にしか興味が無い愚か者である。旧家の名誉と資産のために嫁いだだけの身の上なのだ。虚栄によって結婚した女の末路である。

サー・ウォルターは虚栄もさることながら、愚鈍によっても強く特徴づけられる人物である。准男爵という体面を維持したいのはわかるが、あまりにも愚かである。収入が限られているにもかかわらず、贅沢三昧にうつつを抜かし、経済的理由でケリンチ館を人に貸し、一家は借家住まいをせざるを得なくなるのだ。問題なのは、彼が一向に自分の経済状態を理解しようとはせず、贅沢を止めたがらないことである。アンやラッセル令夫人の節約の説得を受け入れず、彼の態度はこうに酷いものだ。

“What! Every comfort of life knocked off! Journeys, London, servants, horses, table,—contractions and restrictions every where. To live no longer with the decencies even of a private gentleman! No, he would sooner quit Kellynch-hall at once, than remain in it on such disgraceful terms.” (17)

移住地の候補としてロンドン、バース、故郷の小家が挙げられるが、サー・ウォルターはまずロンドンを主張する。まだ、ロンドンという物価の高いところで贅沢することに固執しているのだ。儉約家のアンは故郷の小家を主張するが、父親はこれを認めず、ようやくバースに安住することに意見がまとまる。ラッセル令夫人が田舎での隠棲は准男爵にはあまりにも哀れに思い、バースを推したのである。オースティンは令夫人のバースへの愛好をこうつけ加える。

Lady Russell was fond of Bath in short, and disposed to think it must suit them all; ... (18)

サー・ウォルターが遊興の人ならば、ラッセル令夫人は体面の人なのである。

シェパード氏の取りまとめによって、海軍のクロフト提督 (Admiral Croft) がケリンチ館の借り主となる。しかし、サー・ウォルターは愚かなことに借り主の職業にまで難癖をつける。

“The profession has its utility, but I should be sorry to see any friend of mine belonging to us.” (22)

理由は卑賤な連中が高貴な暮らしをすることは許しがたいし、水兵は老け込んで醜くなりやすいかららしい。明らかにサー・ウォルターは海軍軍人に邸宅を貸すことが気に入らないのだが、どうしようもない。愚かにも己の経済状態に目をつぶり、贅沢な生活を続けたいならば、

誰に貸すかは選びようがないからだ。

3. アッパークロスにおける人間関係

アンは父親とは反対の意見を持ち、海軍軍人は国のために戦ってくれた立派な人たちだと考えていた。彼女はクロフト提督がトラファルガー海戦 (the Trafalgar action) にも参加した海軍少将であることを思い出す。驚いたことに、彼はエリオット家の面々とは無縁の人ではなかった。彼の妻はウェントワース大佐の姉だったからである。そして、現実にウェントワース大佐がケリンチ館に戻ってきて、彼女の凍り付いた恋心は溶け始める。ウェントワース大佐が加わることで、アッパークロスの人々の交流が俄に活気を増してくる。この一連の動きの中で、ウェントワース大佐の価値が高まり、逆に田舎の地主階級の人々はその無能ぶりをさらけ出すように仕組まれている。⁽⁷⁾ アッパークロスにおける人間関係について見てみよう。

ラッセル令夫人はよほどアンが気に入っているように見える。ケリンチでは、アンは令夫人の寓居であるケリンチ荘 (Kellynch-lodge) を訪れることを日課としていた。エリオット家の人々はミカエル祭 (9月29日) にバースに移住する予定である。しかし、ラッセル令夫人はアンの出立をクリスマスまで遅らせるよう進言する。その理由は、アンは役立たずだからとのことである。これは実に不可解ではあるまいか。アンほど家族の中で利口な者はおらず、単純に令夫人は自分の都合に合わせアンを引き留めているようにしか見えない。

それだけのことなら、アンに生活にさしたる変化は訪れない。彼女はケリンチ荘にしばらく暮らせばいいだけのことである。しかし、オースティンはある理由を設けて、アンをアッパークロスの人々と交流させる。例によって、メアリは病弱で身の回りのことができず、姉に秋はずっと彼女の住まうアッパークロス荘 (Uppercross Cottage) に泊まって欲しいと訴えるのだ。アッパークロス荘はメアリの夫チャールズの両親、老マスグローヴ夫妻が暮らす本邸 (the Great House) から1/4マイルしか離れていない。そこで、老夫婦と若夫婦を交えたアッパークロスの人々と、アンは交流を始める。アンのみケリンチ館の面々から切り離したのは、マスグローヴ家の人々の愚鈍ぶりを提示するための、オースティンによる戦略であろう。

まずは、メアリがマスグローヴ家には適応していないことが指摘されねばならない。明らかに、彼女は精神的に病んでいる。姉を呼び寄せた日の朝、彼女は発作を起こしたのである。エリオット家の虚栄を受け継いでいるため、常に彼女は嫁ぎ先では無視と虐待に遭っているような気がしてならない。体調不良を訴えても、夫は朝か

らお楽しみの狩猟にうつつを抜かしている。老マスグローヴ夫妻も何もしてくれない。夫の妹たち、ヘンリエッタ (Henrietta) 20歳とルイーザ19歳は、義理の姉のために都合をつけることを知らない。実家が全員バースに移住すればどうなるか、彼女は不安でしょうがないのだ。

男児二人が悪戯盛りなのも、メアリには頭の痛い問題である。夫の実家の孫たちへの甘やかしぶりも気になってしょうがない。実家の母は、まるで子育てには無干渉なのだ。さらに、実家から召使いとして派遣されている家政婦と洗濯婦は一彼女に言わせれば一ろくに仕事をせず一日中村をほつつき歩いているらしい。その根拠は、行く先々で彼女らに出会うからということだった。たまたま出会っただけという偶然性に考えが回らないことが、彼女が精神的に参っていることの証左であろう。二度子供部屋に行けば一彼女の見解では一家政婦と洗濯婦のどちらかがいない。どちらかが他所で働いているという単純な想像さえ、彼女にはできない。唯一信頼できるのは身の回りの世話をしてくれる、若い家政婦ジェマイマだけである。仲間として意識されているのは、ジェマイマだけなのだ。

とどのつまり、若夫婦の考え方はこんなふうになっただけで、噛み合わなくなってしまう。

"I wish you [Anne] could persuade Mary not to be always fancying herself ill," was Charles's language; and, in an unhappy mood, thus spoke Mary;—"I do believe if Charles were to see me dying, he would not think there was anything the matter with me. I am sure, Anne, if you would, you might persuade him that I really am very ill—a great deal worse than I ever own." (40)

実家も、若夫婦も、子供たちも、全員が好き放題の何の秩序もないのが、アッパークロスの両家の状態だった。その中で、もともと甘やかされて育ったメアリは、精神的に参ってしまっているのだ。

ウェントワース大佐の登場は、対比の効果によりアッパークロスの無秩序を際立たせる効果を持つ。既に亡くなっているマスグローヴ家の次男、リチャード (Richard) についての言及はその一例になろう。この道楽息子は家を飛び出し、さんざん実家に金を無心したあげく、ウェントワース大佐に拾われたのである。リチャードが海軍で暮らしたのは数年間だったが、ウェントワース大佐が艦長として勤務していたラコニア号 (the Laconia) で働いたのは半年ほどだった。リチャードがラコニア号から家族に出した手紙は2通だけで、後は金の無心だけだった。彼はほどなく20歳前に亡くなるが、家族は誰も悲しまず、かえって清々する始末だった。

アッパークロスの無秩序の実例には事欠かない。マスグローヴ若夫婦の長男チャールズ (父親と同名) を襲う

事故と、その後の対応も好例だろう。チャールズは遊びの際に転んでしまい、鎖骨が外れ、背中に重傷を負ってしまう。メアリはヒステリーに陥り、何の役にも立たず、後の世話はすべてアンがしなければならない。薬剤師を手配し、父親を呼びにやらせ、召使いたちに指示を出し、メア리를勇気づけ、怪我をした子供の面倒を見なければならない。薬剤師のロビンソン氏（Mr. Robinson）の診断では、子供はけっこう酷い状態にあった。ロビンソン氏が眉を顰めるほどの大怪我だった。義理の兄が駆けつけてくれたからよかったものの、アンは大変な苦勞をしてこの事態を処理する。

その後の事情も、アップパークロスの分裂状態を示唆している。ヘンリエッタとルイーザは甥の怪我などどこ吹く風とばかり、好男子のウェントワース大佐の噂話に花を咲かせる。前に二人が夢中になっていた男よりも大佐が素敵に見えとか、父親が彼を食事に招くとか一欣喜雀躍して噂している。甥のことはすっかり忘れ、どちらかが大佐をものにする算段ばかりなのだ。そして、大怪我をした我が子を抱えた父親チャールズでさえ、ウェントワース大佐のところへ出かけようとする。さらに、アンが看病をしてあげるからと言うと、母親のメアリでさえそそくさと夫に付き従っていく。

しっかりと人間関係は、アンとウェントワース大佐の間にのみ存在するのではないだろうか。婚約解消から8年あまり経ち、どうやってお互いに顔を合わせたらよいのだろうか。お互いに傷つけ合うことなく、道理に適った行動をどう取ったらいいのだろうか。ゆっくりと慎重に心理的距離を縮め、彼らは関係の修復に努める。これはアップパークロスの面々たちの行動様式とは対比的になされていく。

ウェントワース大佐は心憎いほどの気配りの人である。アップパークロス荘に招待されると、重病の子供がいるので立て込んではいけなと本邸への訪問を優先させる。それでもチャールズが強く訪問を勧めると、大佐は先に訪問することを家に伝えておいて欲しいと求める。これは明確に、アンに心理的準備をさせるための時間稼ぎと言えるだろう。

無理矢理アップパークロス荘に招かれて、わずかな交流の後、ウェントワース大佐はケリンチ館への帰途につく。アンと大佐の挨拶はぎこちない、ほんの短いものだった。愚鈍なメアリはやはり愚鈍ぶりを発揮する。大佐の訪問の後、彼女は姉に何のデリカシーもなくこう述べる。

“Captain Wentworth is not very gallant by you, Anne, though he was so attentive to me. Henrietta asked him what he thought of you, when they went away; and he said, ‘You were so altered he should not have known you again.’” (53)

女性にとってはショッキングな発言だろう。19歳から

27歳までの8年間に、アンは若々しさをすっかり失っていたのである。しかしながら、アンの見たところ、大佐は何も変わったところはなかった。昔のままの凛々しい、輝かしい、魅力的な男性だった。若さを枯らしてしまったのは自分だけだった。この台詞を伝え聞きした当初は酷い仕打ちと思った。しかし、アンは賢明にも自分を客観的に見つめる眼を持っていた。それに類する発言はあったにしても、心優しい大佐が自分の耳に入れる目的でこんな台詞を吐くはずがない。また、とどのつまり、責任は自分にあることは明白である。ラッセル令夫人の説得に屈したとはいえ、自分から大佐を振ったことに間違いはないのだから。自分が弱くて、臆病だったから、大佐の愛に応えられなかったのだ。アンは心を痛めつつも、自分の責任をしっかりと受け止めようとする。

オースティンはアンにはわからないことを読者に伝えることで、プロット展開に対する彼らの興味を掻き立てる。ケリンチ館における姉ソフィア（Sophia）との会話で、ウェントワース大佐は今回のアップパークロス訪問がまさに結婚相手を探すことであることを打ち明ける。彼は海軍で功績を挙げ、財産はたつぷりと手に入れている。家屋敷を買うことさえできる。後は、結婚相手を見出すことだけだ。結婚願望はこのように明々白々である。

“Yes, here I am, Sophia, quite ready to make a foolish match. Any body between fifteen and thirty may have me for asking. A little beauty, and a few smiles, and a few compliments to the navy, and I am a lost man. Should not this be enough for a sailor, who has had no society among women to make him nice?” (54)

しかし、彼はアンだけは「唯一の秘密の例外」 his only secret exception” (54) にしておいた。「例外」とは曖昧な物言いである。求婚してはいけない相手かもしれないし、特別までも求婚したい相手かもしれない。しかしながら、彼にとってまさに特別関心のある女性と考えて間違いないであろう。読者はこうしたことで、小説のプロット展開に従って、否応なくアンと大佐の復縁を予想せざるを得ないのだ。

アンと大佐の関係が秘められた意識の内側で静かに進行していくのと対照的に、アップパークロスの他の人々の恋愛関係はあからさまに、互いの愚かさを照らし合うように展開していく。大佐はアップパークロスではとても好意的に受け入れられるが、それに敵意を燃やす人物が現れる。近傍で牧師補を勤めるチャールズ・ヘイター（Charles Hayter）という、マスグローヴ家には劣るものの相当な資産家の長男だった。愛想の良いチャールズ・ヘイターは教区に住まう必要がなく、ウィンスロップ（Winthrop）という場所にある父親の屋敷で呑気に暮らしていた。チャールズ・ヘイターとヘンリエッタは

随分前から懇ろな関係にあった。マスグローヴ夫人とヘイター夫人は姉妹であったが、結婚後は資産の点で前者が随分と豊かで、後者はまったくお話にならなかった。チャールズ・ヘイターにしてみれば、ヘンリエッタを突如現れた海軍大佐に持って行かれるのは、たまったものではなかった。メアリはチャールズ・ヘイターにも虚栄心を持っていた。嫁ぎ先とはいえ、マスグローヴ家があんなヘイター家と縁組みするなど、彼女はまったく格式に反することだと思っていた。夫の言い分では、チャールズ・ヘイターはいずれ正式な牧師になるし、トントン (Taunton) という所の農場や、ウインスロップの150エーカーの地所を相続するのだから、ヘンリエッタのいい相手だということだった。金銭にうるさく、虚栄心の塊のメアリは、姉にこううるさく言い放つ。

“Charles may say what he pleases,” cried Mary to Anne, as soon as he was out of the room, “but it would be shocking to have Henrietta marry Charles Hayter; a very bad thing for *her*, and still worse for *me*; and therefore it is very much to be wished that Captain Wentworth may soon put him quite out of her head, and I have very little doubt that he has. She took hardly any notice of Charles Hayter yesterday.” (66)

この発言がどんなに姉の心を傷つけるのか、メアリにはまったく想像ができないのであった。

チャールズ・ヘイターのウェントワース大佐への対抗心は喜劇的でさえある。親の躰が悪いウォルターは、アンにしつこく絡みついてくる。アンは病気のチャールズの世話がさっぱりできない。そのとき、ウェントワース大佐がひょいとウォルターをひつつかんで彼女を解放してやる。割って入られたチャールズ・ヘイターは悔しくてしょうがない。アンは彼の言葉にこんな印象を持つ。

She had a strong impression of his having said, in a vexed tone of voice, after Captain Wentworth's interference, “You ought to have minded *me*, Walter, I told you not to tease your aunt;” and could comprehend his regretting that Captain Wentworth should do what he ought to have done himself. (69)

要するに、チャールズ・ヘイターはマスグローヴ姉妹の面前で、大佐に先を越されたことが悔しくしょうがないのだ。しかしながら、チャールズ・ヘイターにはなかなか戦略的なところがある。彼には、ヘンリエッタの心が自分とウェントワース大佐に分割されていることがわかっていて。さらには、ウォルターの悪戯の一件から、ウェントワース大佐とアンの微妙な関係にも気づいたのであろう。ここは一步引き下がって、ヘンリエッタに不安感を与えた方が得策ではあるまいか。万が一、ウェントワース大佐とアンが復縁してしまえば、ヘンリエッタ

にとって安全牌であるチャールズ・ヘイターの価値はぐっと上がる。もしも安全牌であるチャールズ・ヘイターが、ウェントワース大佐への自分の接近ぶりを見て、自分を見限ってしまったらどうであろうか。ヘンリエッタは資産家の男を二人とも失い、まさに虻蜂取らずになってしまうのではないであろうか。いったん引き下がったチャールズ・ヘイターに対し、アンはさりげなくこんな感情を持つ。

Anne could only feel that Charles Hayter was wise. (70)

オースティンの巧みな表現力は、こんなところにこそ見出されるべきである。なぜなら、これからこの言葉が重みを持つ事件が起こるのだから。

マスグローヴ姉妹は暇をもてあまし、遠足に行かないかと皆を誘う。アッパークロスの主立った登場人物たちはこぞってこれに賛成し、彼らはそそくさと出かける。あの見栄っ張りのメアリでさえ、自分の足の弱さを印象づけまいとこれに参加する。そして、実に興味深いことだが、後からわかったことには、その遠足の方向はウインスロップを目指していた。つまり、ヘンリエッタがチャールズ・ヘイターとの関係修復を意図して企んだのがこの遠足だったに違いないのである。

この遠足を通して、アッパークロスの面々の愚かさが浮かび上がり、逆にアンとウェントワース大佐の賢さが強調されるという仕掛けになっている。遠足の参加者はマスグローヴ姉妹、マスグローヴ若夫婦、アンとウェントワース大佐の6名である。ヘンリエッタはもともとチャールズ・ヘイターとの関係修復を狙っているので、あまりウェントワース大佐には接近しない。それに比べて、俄然頑張ってくるのがルイーザであった。ヘンリエッタにいくらかの狡猾さがあるとすれば、ルイーザには臆面もなく男に迫る大胆さがあった。後者はこの遠足では特に陽気に振る舞い、明らかにウェントワース大佐を籠絡しようとしているのだ。

ルイーザの行動は後々空回りすることになるが、愚かとしか言いようがない。彼女はウェントワース大佐を独占したまま離れようとしな。彼はその状態にあって、ふとこんなことを何気なく言う。

“What glorious weather for the Admiral and my sister! They meant to take a long drive this morning; perhaps we may hail them from some of these hills. They talked of coming into this side of the country. I wonder whereabouts they will upset to-day. Oh! it does happen very often, I assure you — but my sister makes nothing of it—she would as lieve be tossed as not.” (71-72)

これに対するルイーザの受け答えには、まさにオースティンの才気煥発ぶりが見て取れるだろう。

“Ah! You make the most of it, I know,” cried Louisa, “but if it were really so, I should do just the same in her place. If I loved a man, as she loves the Admiral, I would be always with him, nothing should ever separate us, and I would rather be overturned by him, than driven safely by anybody else.” (72)

要するに、ウェントワース大佐はクロフト提督夫妻を乗せた馬車が転覆してしまった場合のことを、冗談を交えて言っているのだ。姉が馬車から放り出されることに関する台詞は、多義的であるからこそ妙味を持つのである。姉は事故に無頓着であるのかもしれないし、夫と長年連れ添ったのでそろそろ馬車から放り出されても結構と言っているのかもしれない。ひょっとして姉夫婦の仲の良さを、暗に当てこすっているのかもしれない。どれ一つとして決定的な意味にはならない。しかし、この台詞を事故が起きるときでも夫と一緒にいたいという人妻の熱愛として大真面目に受け取るのは、ピクニックのこの場面ではいかにも相応しくない。ところが、ルイーザはそれを冗談とは受け取らず、事故のときでも好きな男とは一心同体でいたいと言ってしまったのである。「私は奥様の場合と同じことをいたします」と言われてしまったのでは、大佐とルイーザの間にコミュニケーションが成り立たなくなってしまう。だからこそ、ルイーザの受け答えに続く以下の展開が味わい深さを持つてくる。

It was spoken with enthusiasm.

“Had you?” cried he, catching the same tone; “I honour you!” And there was silence between them for a while. (72)

ルイーザは自らの愛の深さを誇張してしまった。そのことに呆れた大佐は、彼女の口調を真似たのである。「大したお方だ!」という台詞は、コミュニケーションの打ち切り宣言である。だからこそ、しばらく二人の間でしばらく交わす言葉がなくなってしまった。

ルイーザの自分勝手に、愚鈍な振る舞いが目につくようになる。ウェントワース大佐はそれに手を焼いているようだ。彼女は大佐を灌木林の中に誘い込み、二人きりになろうとする。二人きりになったとわかるや、とたんにルイーザは大胆になってくる。この遠足自体はヘンリエッタがウインスロップに行く口実として持ち出したものだが、それを後押ししたのは自分だと告白してしまう。自分はやりたいことを押し通す人間だと、自らの決断力の堅さを誇示する。どれも、先ほどのクロフト提督夫妻に絡めて言った愛の強さに関連することばかりだ。

これに対するウェントワース大佐の受け答えは、またも妙味のある台詞である。胡桃を喩えとして用いながら、彼はこう答える。

“Here is a nut,” said he, catching one down from an

upper bough. “To exemplify, — a beautiful glossy nut, which, blessed with original strength, has outlived all the storms of autumn. Not a puncture, not a weak spot any where. — This nut,” he continued, with playful solemnity, — “while so many of its brethren have fallen and been trodden under foot, is still in possession of all the happiness that a hazel-nut can be supposed capable of.” Then, returning to his former earnest tone: “My first wish for all, whom I am interested in, is that they should be firm. If Louisa Musgrove would be beautiful and happy in her November of life, she will cherish all her present powers of mind.” (74-75)

ルイーザはこの台詞に対し、どう返事をしているものかわからない。この高尚な言い回しについては、彼女は沈黙を守るしかない — 何か感想ぐらい言えたかもしれないが。しかしながら、大佐はひょっとして、どこか灌木林の近くにいるアンに対してこの台詞を言ったのではないだろうか。あるいは、そうではないとしても、アンに聞かれても構わないと思って、このような発言をしたのではないだろうか。あるいは、少なくとも、アンへの思いがまだ大佐の胸に宿っていたからこそ、このような発言に結実したのではないだろうか。それほど、この台詞はアンにこそ言うのが相応しい内容なのである。胡桃は「生来の強さであらゆる秋の嵐を生き延びた」 — これはアンが若さを失いつつも、周囲の環境変化に耐え抜いたことを暗示する。胡桃には「穴一つなく、どこにも弱点はない」 — これはアンの志操堅固ぶりを暗示する。胡桃は「多くの兄弟たちが落ちて脚で踏まれる一方、いまだに榛の実が持ちうるだろう幸せを保っている」 — これはアンが周囲で起こる縁談にもかかわらず、もともと好きな男と添い遂げるのを待っていることを暗示する。最後の一文は主語をアン・エリオットに置き換えるべきだろう。「もし人生の十一月において美しく幸せであることを望むならば、今の心の強さを大事にされることでしょう」 — これこそ、女の盛りを下り始めたアンにこそ語りかけるのに相応しい台詞なのである。

ルイーザは感情の娘であり、考えてものを喋ることをほとんどしない。この小説において彼女が果たす主要な役割は、プロット展開に寄与することくらいである。すぐにこの女は頭に浮かんだことを言ってしまう — メアリがお高くとまっているから嫌いなのだと。その後で、兄チャールズの嫁にはアンが相応しかつたのにと口惜しく述べる。しかし、その理由は一言もない。ただ、ラッセル令夫人がチャールズを評価してなかったから、アンとの縁談はまともなかつたのだと、これも当てずっぽうで言ってしまう。本当は、ラッセル令夫人はアンの婿としてチャールズを推していたのである。

しかしながら、ルイーザが勝手に始めたウェントワース大佐の会話は、アンの心にただならぬ動揺をもたらす。

She [Anne] saw how her own character was considered by Captain Wentworth; and there had been just that degree of feeling and curiosity about her in his manner, which must give her extreme agitation. (75)

もちろん盗み聞きしているアンが会話に加わるわけにはいかないが、彼女の心には彼の心の有り様が伝わったのではないだろうか。二人の愛は消えてなくなったわけではない—そういう思いに、アンは動揺しているのではないだろうか。

ウインスロップへの遠足は、アップパークロスの主要人物たちの性格を浮かび上がらせる効果を持つ。ルイーザが気の強いのに比べて、ヘンリエッタは我が儘な性格だった。自分一人では遠足を言い出した計画がばれてしまうので、チャッカリチャールズを従えて、ウインスロップを訪れていた。もともと、ヘンリエッタと仲直りしたかったチャールズ・ヘイターは、この兄妹の訪問にすっかりご満悦だった。彼にしても、自分の計画が成就したのだった。ほんの少し前までは、ウェントワース大佐に嫉妬して、アップパークロスから姿を消していたチャールズ・ヘイターは遠足の帰り道に同行することに同意する。見栄っ張りのメアリはマスグローヴ兄妹がいなくて、ウェントワース大佐に愚痴を言うこともできた。脳天気なチャールズ・マスグローヴは、皆が楽しそうなことに満足していた。

そして、こんな愚かな集団の中で、着々とアンとウェントワース大佐の関係は慎ましくも修復されていった。この遠足の持つ、もう一つの効果は彼らの奥ゆかしい心の接近である。帰り道でクロフト提督の馬車が、同じ方向に向かってくるのに一行は出会う。提督夫妻は予定どおり、遠乗りからの帰路についていたらしい。途中でアップパークロスに立ち寄るから、女性一人なら同乗させられるとのことだった。マスグローヴ姉妹は元気そのものだった。メアリは自分が誘われるべきだとお高くとまっていたが、二人乗りの馬車に三人目として乗るのは品位に欠けると思った。誰も乗らないのかと思い、提督が馬を走らせようとした瞬間、ウェントワース大佐が姉にすかさず助言してくれた。提督夫人はアンが疲れているはずと言い出し、大佐は彼女が狭い馬車に乗り込むのに手を貸してくれた。実際に疲れていたアンは、ほっとしてアップパークロスまで帰ることができた。こんなふうに、目に見える交流はわずかではあっても、二人の心の通い合いは着実に進んでいくのである。

4. ライム・リージスと偶然の力

ライム・リージスは英国南西部の海岸沿いにある保養

地である。夏場なら良かっただろうが、アンたち一行がこの土地を訪れたのは肌寒い十一月のことである。そして、彼女が人生の肌寒さを経験するのもこの土地である。⁽⁸⁾ ラッセル令夫人が言う説得、いわば上流階級の淑女が従うべき規範が、まったく通用しない偶然の力が猛威を揮うのもこの土地なのだ。チャールズ・マスグローヴを結婚相手に勧めたラッセル令夫人の説得は、既にアップパークロスにおいて信憑性をなくし始めていた。彼の馬鹿馬鹿しいほどの無能ぶり、さらに遊興三昧の暮らしはどう見ても魅力に欠けるものだった。しかし、アンには准男爵家の娘として守るべき倫理観があった。無碍に令夫人の説得を打ち捨てるわけにはいかない。ウェントワース大佐を勧めない令夫人の説得は、まだ効力を失ったわけではないのだ。大佐への愛情と上流階級の倫理観、いわば感情と理性はアンの内面で対立を続ける。そして、偶然の力は、思わぬ効果をアンと大佐の関係に對して与えるのである。

ライム・リージス行きは単純な経緯から起こった。ウェントワース大佐の友人ハーヴィル大佐 (Captain Harville) がこの冬をライム・リージスで過ごすから、一緒にどうかというお誘いがあったのである。ウェントワース大佐が行くらしいから、若い人々は皆がそれに同行したがった。それであっさりと旅行が決まったのだ。参加者はウインスロップへの遠足のときと同じで、マスグローヴ若夫妻、マスグローヴ姉妹、アンと大佐の6名だった。

アップパークロスからほんの17マイルほどの距離だったので、すぐにライム・リージスには着いてしまった。ハーヴィル大佐宅には、不思議な雰囲気を持つジェイムズ・ベンウィック大佐 (Captain James Benwick) という人物も同居していた。この男には、バイロン卿 (George Gordon Byron, 6th Baron Byron) の詩を愛好する、何か打ち沈んだところがあった。ウェントワース大佐によると、彼は元ラコニア号の大尉であり、婚約者のファニー (Fanny) を亡くした身の上だということだった。そして、ファニーとはハーヴィル大佐の娘だったのである。⁽⁹⁾

ライム・リージスとは簡単に言って、ウェントワース大佐の友人たちの住まう空間ある。⁽¹⁰⁾ 場所の放つ雰囲気は解放感と真摯さである。大佐の友人たちは真摯で、策を弄するところがまるでない。これはアップパークロスとはまるで違っている点である。この土地の機能として、オースティンが狙っているのは、それぞれの人の本当の気持ちを素直に表現させるという点、あるいはそれぞれの人の本質を見せつけるという点にあるだろう。

人間性が自然に滲み出るという点から、興味深いことはベンウィック大佐がアンに惹かれ、ルイーザがさらに大胆にウェントワース大佐に迫るという事態の進展である。最初、アンはベンウィック大佐に同情する。婚約者

を亡くしたという点で、アンは彼が自分と似たような境遇にいたと思ったのだろう。このベンウィック大佐はスコット (Walter Scott) の『マーミオン』(*Marmion*) や『湖上の麗人』(*The Lady of the Lake*)、バイロンの『邪宗徒』(*The Giaour*) や『アバイドスの花嫁』(*The Bride of Abydos*) を愛読し、ロマンティックな世界に浸り込むのが日課だった。明らかに、亡き婚約者への思いに沈み込んでいるのだ。これをアンは良くない傾向と思い、彼にはもっと道徳的で宗教的な散文を読むように勧める。いわば、モラリストとしてのアンが姿が浮かび上がってくる。ベンウィック大佐は彼女によって救われたかったのであろう。アンが勧めてくれた本についてメモを取り、必ず読むようにすると約束するのだった。

ベンウィック大佐との関係はこれで終わりかと思いきや、またも彼はアンに接近してくる。話はきまってスコットとバイロン卿だった。前回と同じように、二人の意見は一致しない。ただし、相手がアンに慰めを求めていることは明らかだった。そして、慰めという点で、アンはハーヴィル大佐から、ウェントワース大佐が大変なことをベンウィック大佐にしてあげたことを聞かされる。彼の恋人ファニーの死を友人に告げるという大役を果たし、その後一週間も彼に付き添ってやっただけなのである。つまり、アンは自分がやってあげていることの何倍ものことを、既にウェントワース大佐がしたことを知るのである。この一件も、アンがウェントワース大佐の人間価値を知るという効果を生むのである。

多くの人たちと交際を深める中で、アンはウェントワース大佐との間にあまり距離を感じなくなっていた。彼女はこう述懐している。

Anne found herself by this time growing so much more hardened to being in Captain Wentworth's company than she had at first imagined could ever be, that the sitting down to the same table with him now, and the interchange of the common civilities attending on it—(they never got beyond) was become a mere nothing. (84)

ライム・リージスの開放性も手伝って、ウェントワース大佐に関する優しさや人間性に関する情報を受け取り、アンは彼への態度をどんどん軟化させていくのである。

ここでライム・リージスが作品中持つ、大きな特徴である偶然性とその効力を発揮する。砂浜からの階段を上がろうとするとき、アン、ウェントワース大佐、そしてマスグローヴ姉妹は、ある立派な紳士がちょうど同じ階段を降りてくるのに出くわす。紳士は丁寧にさっと退いて道を譲ってくれた。少し長くなるが、そのときの微妙な描写を見ておこう。

They ascended and passed him; and as they

passed, Anne's face caught his eye, and he looked at her with a degree of earnest admiration, which she could not be insensible of. She was looking remarkably well; her very regular, very pretty features, having the bloom and freshness of youth restored by the fine wind which had been blowing on her complexion, and by the animation of eye which it had also produced. It was evident that the gentleman, (completely a gentleman in manner) admired her exceedingly. Captain Wentworth looked round at her instantly in a way which shewed his noticing of it. He gave her a momentary glance, — a glance of brightness, which seemed to say, "That man is struck with you, — and even I, at this moment, see something like Anne Elliot again." (87)

後ほど、この紳士はエリオット氏であることがわかる。サー・ウォルター・の甥で、エリオット家の相続人である。このエリオット氏がほれぼれと見つめるほど、アンはライム・リージスの潮風のせい、生き生きとして、若々しく、素晴らしく美人に見えた。完全な紳士のエリオット氏はアンに参ってしまう。これを見たウェントワース大佐は—ある程度の嫉妬心も手伝ったかもしれないが—同じようにアンに打たれてしまう。彼の眼の輝きを記した最後の描写は、彼がアンは昔のアンとちっとも変わっていないと認めたことを雄弁に物語っている。アップパークロスでの、アンはすっかり変わってしまったという彼の発言は、やはりアップパークロスというしゃちこ張った空間が生み出したものであった。人間を活性化させるライム・リージスの潮風は、アンを本来のアンとして提示したのだ。そして、偶然こんなところに二人の求愛者が出くわしたことが、ウェントワース大佐をしてアンの変わらぬ美に目覚めさせたのだろう。

ライム・リージスが人間の本性を目覚めさせるという機能は、ヘンリエッタにも影響を与えたのではないだろうか。彼女はしきりとシャーリー博士 (Dr. Shirley) という、アップパークロスの病気がちな教区牧師はライム・リージスに移住したらいいと言う。

He declares himself, that coming to Lyme for a month, did him more good than all the medicine he took; and, that being by the sea, always makes him feel young again. Now, I cannot help thinking it a pity that he does not live entirely by the sea. I do think he had better lieve Uppercross entirely, and fix at Lyme. (86)

一見すると、博士の健康を願った親切な発言のようだ。しかし、裏側には年寄りにはさっさと隠居して、チャールズ・ヘイターに聖職禄を譲るべきだという意味が込められているように思われる。

ベンウィック大佐とアンが付き合っていることは、ルイーザとウェントワース大佐の接触が増えるということになる。語りの視点がアンを追っているために、主要登場人物たちがライム・リージスにいる部分では、ルイーザはある事件の勃発までは、あまり登場してこない。しかしながら、ラッセル令夫人のような人がライム・リージスにもいるべきだというヘンリエッタの主張に、アンが通り一遍の賛同を表する部分はこう描かれている。

... she had only time, however, for a general answer, and a wish that such another woman were at Uppercross, before all subjects suddenly ceased, on seeing Louisa and Captain Wentworth coming towards them. They came also for a stroll till breakfast was likely to be ready; ... (87)

微妙な表現ながら、ルイーザとウェントワース大佐は朝食前の散歩を楽しむまでの間柄になっているのである。

こうした二人の親密さが、コップでの事故の伏線を構成する。ライム・リージス出立の朝、一行は最後の見納めに、もう一度コップを歩くことになる。その際、ルイーザは突堤を上段から下段へと飛び降り、ウェントワース大佐に身体を抱き止めてもらう。一度目の跳躍は成功だった。大佐に抱かれてうっとりしたルイーザは、もう一度の跳躍をせがむ。大佐は危険だから止めるよう説得するが、彼女は言うことを聞かない。そして、二度目の跳躍があまりに性急だったため大佐の準備が間に合わず、彼女の身体は硬い石畳に叩き付けられてしまう。ライム・リージスでの遊興は、忌まわしい事故で終わりを告げるのだ。

ルイーザとウェントワース大佐の接近という伏線はあったが、この事故自体はまったくの偶然であった。この偶然の要素を持ち込むことで、オースティンはアンの人間的価値を高め、大佐とのさらなる関係修復を実現するのである。ルイーザは意識不明の重体である。メアリは彼女が死んだと叫び回る。ヘンリエッタは卒倒して何の役にも立たない。チャールズはパニックに陥った妻とルイーザを交互に眺めているだけである。アンは土地に詳しいベンウィック大佐に医者呼んでくるよう依頼する。応急処置はアンで指示で施される。終始落ち着いたのはアンだけなのだ。ウェントワース大佐は怪我人をハーヴィル大佐の家に運び込む。医者がすぐに手当てをしてくれる。手足は大丈夫だが、問題は頭部への衝撃だろうと診断が下った。いったん目を覚ましたルイーザは、再び意識を失ってしまう。彼女はアン適切な指示で一命を取り留めたのだ。アンこそが命の恩人と言えよう。

ウェントワース大佐がアンにライム・リージスに残ってルイーザの看病に当たって欲しいと頼み、アンがそれ

に応じる部分には二人の恋心が復活した雰囲気がある。

"You will stay, I am sure; you will stay and nurse her," cried he, turning to her and speaking with a glow, and yet a gentleness, which seemed almost restoring the past. — She coloured deeply; and he recollected himself, and moved away. — She expressed herself most willing, ready, happy to remain. "It was what she had been thinking of, and wishing to be allowed to do. — A bed on the floor in Louisa's room would be sufficient for her, if Mrs. Harville would but think so." (95-96)

この偶然の事故は二人の結びつきに大いに貢献したのである。ただし、意図的ではないとはいえ、周りがそれを許さない。老マスグローヴ夫妻に事の次第を伝える必要がある。問題は誰が行くかだ。一足先にウェントワース大佐が足の速い宿の軽馬車で行き、翌朝チャールズが自分の馬車で行くことになった。例のファニー・ハーヴィルの夭逝の場合と似たような対応である。具合の悪いヘンリエッタは、アップパークロスに送り届けねばならない。すると見栄っ張りのメアリが本領を発揮する。役立たずのくせに、彼女はアンが残るのは我慢がならないと言うのだ。ルイーザは義理の妹だから、縁故関係から自分が優先だという理屈である。アンはあれこれ揉めるよりも、自分が折れることを選択する。大佐は馬車の用意を済ますと、アンが役が無能のメアリに代わっていることに憤慨する。しかし、彼も無用な紛糾を起こすことを好まない。結局、先に帰ったのはウェントワース大佐、アン、ヘンリエッタだった。大佐は一人でアップパークロスの邸宅に入り、老夫婦にできる限り刺激を与えないように報告し、嫌な役を引き受けてくれた。二人の女性を残して、ウェントワース大佐はライム・リージスに引き返す。ルイーザへの責任感を負っているため、心配でしょうがないからだ。アンとウェントワース大佐の間に恋愛感情が復活しているにもかかわらず、二人ともが周りの状況に対応することを優先させているのである。それと対照的位置に置かれているのがメアリである。この女はライム・リージスに残ることを声高に主張したにもかかわらず、アンが帰ったことを確認すると、さっさとアップパークロスに戻って腰を落ち着けてしまうのだ。義務を果たすことと、体面を維持することの興味深い対照である。⁽¹¹⁾

ルイーザの負傷は確かに不幸なことではあった。しかし、この事故という偶然性の導入は、アンとウェントワース大佐が心を開いて、ルイーザへの処置に協力するという局面を開いてくれた。さらに、二人は自分の行動を周りの状況に合わせることを、個人的思いの実現よりも優先させた。こうして、二人はあくまで社会的協調性という基盤の上に、お互いの新しい関係を樹立するのである。

5. バースは説得の呪縛が解除される空間

ルイーザは何とか快復を果たし、とうとうアンもバースに移住するときがやってくる。クリスマス前には彼女はラッセル令夫人と共に馬車に乗り込み、バースに向かっていた。バースとは、まさに目の前にいるラッセル令夫人の呪縛が解かれる場所であった。賢明で頼りになるラッセル令夫人であるが、アンの成長にとっていつかは制約的存在となるのである。高貴な人たちの社交場たるバースは、ラッセル令夫人にとってお気に入りの場所であった。しかし、アンは喧噪に満ちたバースが大嫌いで、本当はアップパークロスの落ち着いた田舎の雰囲気の後ろ髪を引かれる思いであった。父とエリザベスはすでにキャムデン・プレイス（Camden-place）という場所に立派な家を借りて、優雅な社交生活を楽しんでいた。要するに、バースとは上流階級の空疎な交流の場所であり、アンはそんな軽佻浮薄な付き合いが嫌いだったのである。しかし、バースにおいてアンは自分のアイデンティティを固めなければならない。ラッセル令夫人の側の社会に組み込まれ、将来はなるかもしれないエリオット令夫人として女に磨きを加えることもいいかもしれない。しかし、アンは上流階級の一員として守るべき社会性を身に付ける一方で、階級に縛られない人間的誠実さを獲得する道を選ぶ。ラッセル令夫人の説得が施した呪縛を解くことは、果たしてラッセル令夫人の教えを否定することになるのだろうか。アンがかつて自分を縛った説得の力からどう逃れるのか考察してみよう。

キャムデン・プレイスで再会したサー・ウォルターとエリザベスは、アンには実に墮落した存在に映った。田舎の地所にどっしり腰を落着けた准男爵の面影は既になく、父親はバースの派手な生活に浸りきり、傍らにはクレイ夫人といういかかわしい女もいた。シェパード氏の娘であり、金に困ったこの女が、良からぬ思いを腹に秘めていないはずはなかった。姉も同様に落ちぶれて見えた。たった30フィートばかりの二部屋続きの応接間をすたすたと歩き、姉はその広さを鼻にかけ、立派でしようと言いたげだった。ケリンチ館の広大さをいまだに記憶に留めているアンには、こうも簡単に人間は過去の大事な記憶をなくしてしまえるものかと不思議に思えてしょうがなかった。エリオット家の偉大さは父と姉の頭からは既に消え失せ、アンの記憶の中にようやくその命を繋ぎ止めていたのである。

本宅を人に貸して借家住まいのエリオット家はいわば都落ちの状態だが、さらなる危険に晒されていた。例のエリオット氏がバースをうろつき回っていたのである。彼は見かけから言って完璧な紳士であり、素晴らしい美男子であった。金も唸るほど持っていたし、目から鼻に抜けるような才気煥発ぶりであった。この男はケリンチ

館の相続権を握っており、黙っていても追加の財産が懐に転がり込んでくるはずであった。ただでさえほくほく顔のこの男は、ついでにエリザベスを結婚相手に狙っていたのである。ところが、アンの到着によって、雲行きが変わってくる。ライム・リージスでその美貌に胸を打たれたエリオット氏は、目標を姉から妹に変更し、着々と周りから外堀を埋めるようにアンを我がものにしようと画策していたのである。これはアンにとって、バースにおける大きな試練であった。

エリオット氏は友人たちと一緒に、マールバラ・ビルディングス（Marlborough Buildings）というところに宿泊しており、彼らは既にバースでは人気者になっていた。サー・ウォルターの友人、ウォリス大佐（Colonel Wallis）と彼の美人で名高い妻も、エリオット氏とお近づきになりたいらしい。サー・ウォルターは既にエリオット氏の感化力に参っており、このように末娘を紹介させてくれと言う。

Sir Walter talked of his youngest daughter; "Mr. Elliot must give him leave to present him to his youngest daughter." (116)

毫疎したのであろうか、父親は末娘としてアンを紹介し、メアリがいることは頭から抜け落ちている。アンは仕方なくなるべく末娘らしく、幼い感じで振る舞わねばならない。エリオット氏は当然ながら、ライム・リージスでの事件に関して訊いてきた。アンにさえ、彼は真摯に彼の地での災難について気にかけてくれているように思えた。しかし、それくらいのことは問題ではない。困ったことに、あのラッセル令夫人が、エリオット氏を恐ろしく高く評価し、当然ながらアンの結婚相手に相応しいと考え始めたのだ。令夫人の彼に対する評価はこうである。

Every thing united in him; good understanding, correct opinions, knowledge of the world, and a warm heart. He had strong feelings of family-attachment and family-honour, without pride or weakness; he lived with the liberality of a man of fortune, without display; he judged for himself in every thing essential, without defying public opinion in any point of worldly decorum. (119)

これはアンには、大変な脅威であると言わねばならない。

エリオット氏は昔エリザベスとの結婚を断り、金持ちの身分の低い女と結婚したことがあった。その女はもう亡くなってしまっていた。エリオット家の面々は当時、エリオット氏を卑劣な男と考えていたのであるが、もう皆がそのことは忘れ去っていた。アンはエリオット氏に良い知り合いとはどんな人かと訊いてみたが、こんな答が返ってきた。

“Good company requires only birth, education and manners, and with regard to education is not very nice. Birth and good manners are essential.” (122)

さらに、ローラ・プレイス (Laura-place) の従姉妹たち、ダルリンプル子爵夫人 (Viscountess Dalrymple) とカータレット嬢 (Miss Carteret) とは、精出して付き合った方がいいと勧められる。二人とも、アンには挨拶が丁寧なだけで、何の取り柄もない人たちに思えた。アンはどうやら、エリオット氏には生まれや身分を非常に重んじる性癖があるように思えてくるのだった。正確な観察眼はアンが誇ってよい優れた能力であるし、彼女がこの美男子に対して抱く警戒心はある偶然によって正しかったことが判明するのである。

偶然の力はバースにおいても、小説のプロット展開に大きく影響する。この場合、階級意識のもととあまり強くないアンであるが、階級的にずっと下の人の方がむしろ誠実で、当てになることを見出すのである。アンはかつての自分の女性教師 (ガヴァネス) を訪ね、バースには学友の女性が住んでいることを聞かされる。とても仲のいい友だちだったが、現在は零落して酷い暮らしぶりらしい。アンはその人を訪ねなければならないと思う。アンよりも3歳年上のハミルトンさん (Miss Hamilton) という友人は、現在は結婚してスミス夫人 (Mrs. Smith) と呼ばれていた。アンの母親が他界した際に、とても優しくしてくれた人だった。12年ぶりに会った彼女は夫を亡くし、みすばらしく、寄る辺ない病人になっていた。アンは現実というものの残酷さをはっきりと自覚する。

スミス夫人はラッセル令夫人と著しい対照をなす人物である。令夫人は新刊書を読み漁り、上流階級の慣習に通じ、頼りがいのある指導者である。ただし、どうしても階級意識を持ち、外見にこだわり、理性的すぎるころがあった。令夫人が理性や常識にこだわる人ならば、スミス夫人は現実の人間の実相を知っている人だった。スミス夫人は大家の紹介で看護婦のルック夫人 (Mrs. Rooke) の世話になっており、この人からさまざまな病人たちの姿を聞かされていた。⁽¹²⁾ アンが理性的に病室には数冊の本に値する教訓があると主張すると、スミス夫人は悲しそうに現実はそんなに綺麗事では済まないと答える。

“Here and there, human nature may be great in times of trial, but generally speaking it is its weakness and not its strength that appears in a sick chamber; it is selfishness and impatience rather than generosity and fortitude, that one hears of.” (126-27)

アンの属する階級の人々は満ち足りて理性的に暮らしているが、世の中の大半の庶民は感情の渦の中でもがき苦しんでいるのだ。スミス夫人の話はアンの興味をそそ

り、彼女は友人の住まうウエストゲート・ビルディングス (Westgate-buildings) に足繁く通ようになる。アンは乙に澄ました人間よりも、感情の人間の方が好きだった。特に前者の典型例であるエリオット氏は好かなかった。上流階級の内部で押し殺されている感情の支配力をアンは知り、ラッセル令夫人の理性的態度に足りないものを学んでいく。スミス夫人は実に広汎な人々と交流していた。アンが音楽会に行ったことを話すと、スミス夫人はデューランドさんのお子様たち (the little Durands), イボットソンさんたち (the Ibbotsons), メアリ・マクリーン老夫人 (Old Lady Mary Maclean) のお加減はいかがかと、矢継ぎ早に訊いてくる。驚いたことに、スミス夫人はアンとウェントワース大佐の仲さえお見通しだった。話はアンの当面の課題、エリオット氏との関係に及ぶ。アンはとうとう、ラッセル令夫人なら絶対に知り得ない、人間の持つ裏の顔を知らされるのである。

エリオット氏の話をする際に、スミス夫人はアンの人間性を評価していたのではないだろうか。二度の会見において、スミス夫人は完全に彼に対する意見を変えてしまいうからである。最初の彼女の意見はこうである。

“Let me recommend Mr. Elliot. I am sure you hear nothing but good of him from Colonel Wallis; and who can know him better than Colonel Wallis?” (157-58)

結婚相手にエリオット氏を勧められ、アンは社会常識に照らし、あの方は奥様を亡くされてまだ半年も経っていないので無理だと断る。さらにスミス夫人が彼を褒め称えても、アンは頑として譲らず、結婚の意思を否定する。スミス夫人は、アンの金や地位に関する我欲を計っていたのではないだろうか。もし、それらだけを当てにしている縁談なら、これほど良い話はないからだ。スミス夫人は深々と考え込んだ後で話の本筋に入り、このようにエリオット氏の隠された本質を断罪する。

“Mr. Elliot is a man without heart or conscience; a designing, wary, cold-blooded being, who thinks only of himself; who, for his own interest or ease, would be guilty of any cruelty, or any treachery, that could be perpetrated without risk of his general character.” (160)

スミス夫人によれば、エリオット氏がかつて彼女の夫の親友だった。もともと金銭感覚に乏しかった夫は、エリオット氏と付き合う中で遊興に散財させられてしまった。エリオット氏自身は牧畜業を営む父親を持つ金持ちの娘と結婚し、大変裕福であった。エリオット氏はただ楽しければそれでよく、お人好しのスミス氏が破産しようが知ったことではなく、彼をまったく助けようとはしなかった。スミス夫人は夫の死後、哀れな貧困生活に沈

むしかなかった。アンは金目当てで暮らす男は非道だと上流階級の論理でエリオット氏を非難すると、スミス夫人は意外にも金目当ての生活は世間の常識ではないかと論ずる。⁽¹³⁾ アンは階級の偏見に捕らわれており、良家の娘として鼻を折られた格好なのだ。

エリオット氏は、代々続く先祖の栄誉も毒牙にかけようとしていた。初めてケリンチ館を訪れたとき、なんと測量技師を連れて行ったらしいのだ。この地所は幾らで売れるか、それにこそ彼は興味があつた。そのことを示す証拠の手紙も、スミス夫人は見せてくれた。准男爵の位など、彼にはできれば売り飛ばしたいほどの価値しかなかった。一家を潰しても何とも思わない男だったのだ。しかし、今ひとつ疑問が残る。なぜ彼は、今さらエリオット家の娘を嫁にもらおうとしているのか。その問いにスミス夫人はあの男は金も貯め込み、そろそろ地位が欲しくなったのではと答える。このことを知っているのは、エリオット家ではアンだけだった。アンは驚愕しつつも、スミス夫人に深く感謝する。上流階級の常識では読み解けない人間性というものがあるのだ。

オースティンはラッセル令夫人の良識をどんどんと打ち崩していく。この貴婦人ははっきりとエリオット氏こそ、アンの子に相応しいと腹に括っていた。

Lady Russell was now perfectly decided in her opinion of Mr. Elliot. She was as much convinced of his meaning to gain Anne in time, as of his deserving her. (129)

この良識がまったく通じない世界があつたのだ。これ以外にも、ややユーモラスにラッセル令夫人の観察眼は当てにならないことが示される件がある。アンはある朝、令夫人とパルトニー通り (Pulteney-street) をそぞろ歩きしていた。ウェントワース大佐が偶然、通りの向こう側から歩いてくる。アンは大佐が好きだったから、頬が真っ赤に染め上がる。傍らの令夫人がそれに気づかないはずはない。令夫人の眼はずっと大佐の方に釘付けである。令夫人に二人の仲を感じたかと思ったが、彼女はほとんど大佐とぶつかりそうになっても彼に気づかない。彼が通り過ぎた後、令夫人はこの通りの店が立派な応接間用カーテンを売っているはずだが見つからないと愚痴をこぼす。読者には、令夫人は観察力が衰え始めた、単なるお婆さんではなからうかという解釈も許されるだろう。こうした体験を通じて、令夫人の持つアンへの呪縛は徐々にほどけていくのだ。

こんな令夫人だが、アンはいまだに彼女にスミス夫人の告白への助言を求めようとする。しかし、オースティンは巧妙にも、アンにはその機会がなかったという筋立てにしている。オースティンは令夫人の顔を丸潰れにし、上流階級の見識を否定するという場面を避けたかったのだろう。これは作家としての保守性の表れと言えよう。

ただし、指摘されなければならないのは、アンは令夫人に相談しようと思えば、そうできたという点である。アンはチャールズとメアリと共に、マスグローヴ一家の泊まる白鹿館 (the White Hart) に向かう途中、ラッセル令夫人の宿のあるリヴァーズ通り (Rivers-street) に立ち寄る機会を得た。この際に令夫人の意見を訊けたにもかかわらず、アンはまたの機会に先送りして、白鹿館への道を急いでいる。アンにはもう一回、令夫人と会談する機会があつた。このときはマスグローヴ家の人々との交流があつたり、サー・ウォルターとエリザベスが企画した晩餐会があつたりして、やはり令夫人との会見を延期している。明らかに、彼女は令夫人の意見を軽く見ているのだ。言い換えれば、彼女は令夫人から独立して自分の判断で行動しようとしているのである。

アンとウェントワース大佐は紆余曲折を経て、ついに結ばれる。なぜ紆余曲折を経なければならなかったかと言うと、ラッセル令夫人の説得に打ち勝つほどの愛の強さを、二人が獲得しなければならなかったからである。大佐はルイーザとの関係をハーヴィル大佐に誇張され、ライム・リージスを離れてシュロップシャー (Shropshire) にある兄エドワード (Edward) の家で6週間も過ごすはめになる。しかし、思わぬことにルイーザとベンウィック大佐が婚約し、事情が変わってくる。熱情的なルイーザとロマン派的感性を持つベンウィック大佐は、よく考えてみれば似合いのカップルだった。パースの音楽会での擦れ違いもあつたし、ウェントワース大佐がエリオット氏に嫉妬することもあつた。しかし、アンと大佐は白鹿館でついにお互いの思いを互通せる。きっかけはアンとハーヴィル大佐の会話だった。男と女の愛はどちらが強いかという内容で、アンは男の愛は強いかもしれないが、女の愛は長く続き、愛する男が死んでも消えることはないかと熱弁する。⁽¹⁴⁾ アンが消えていないことを確信した大佐は、彼女に熱烈なラブレターを書いて渡す。当然のことながら、アンは彼の愛を受け入れるのである。二人はお互いに、問題がラッセル令夫人の説得であつたことを気づく。しかし、もう自信を持って令夫人の言葉に対処することができるのである。その対処の仕方についての議論をもって結語としよう。

6. 結 語

アンとラッセル令夫人の説得に対する発言のキーワードは義務である。彼女はウェントワース大佐の愛情を確認した後に、しみじみこう述懐する。

"If I was wrong in yielding to persuasion once, remember that it was to persuasion exerted on the side of safety, not of risk. When I yielded, I thought it

was to duty; but no duty could be called in aid here. In marrying a man indifferent to me, all risk would have been incurred, and all duty violated.” (197)

ラッセル令夫人は可愛いアンが無事に結婚できるようにとの思いから、19歳のときに彼女に婚約を取り消すよう説得したのである。母親代理とも呼ぶべき、愛情に溢れた女性の心尽くしを無視することは、娘にも等しい位置にいる彼女にとって義務を果たさないことと同じであった。ここで、アンが「この場合に義務の助けを呼ぶことはできませんでしょう」と言うのは、エリオット氏との関係を指しているに違いない。エリオット氏とは違って、あなたとの場合は義務を果たしてしっかりと関係を結んだのですよという趣旨のことを、アンは大佐に伝えているのである。

これに対し、ウェントワース大佐もラッセル令夫人の説得の手強さを感じ、ほとんどアンを失ったものと考えていたと告白する。

“I could think of you only as one who had yielded, who had given me up, who had been influenced by any one rather than by me. I saw you with the very person who had guided you in that year of misery. I had no reason to believe her of less authority now. — The force of habit was to be added.” (197)

ウェントワース大佐は恋人の指導者たるラッセル令夫人に対して、直接胸の内を訴えてもよかったかもしれない。恋人の心が縛られていると考えれば、そういう選択肢もあり得たのではないだろうか。彼がそうしなかったのは、彼自身の自信のなさのゆえだろう。彼はそのことを次のように白状している。

“Not yet. But there are hopes of her being forgiven in time. I trust to being in charity with her soon. But I too have been thinking over the past, and a question has suggested itself, whether there may not have been one person more my enemy even than the lady? My own self.” (198-99)

彼の心は、何があろうともアンへの思いを成就するという方向に固まっていない。彼の中には敵、すなわち弱い自分がいて、ずっと彼を苦しめていたのである。実際、6年前に彼がラコニア号の艦長になったとき、彼女に再求婚してもよかったのに、彼はそうしなかったのである。この心の弱さ、思いのあやふやさを克服しないうちは、彼の愛は確かなものではないと言われてもしょうがないであろう。説得はアンと大佐の愛を鍛え、堅固なものに育てていったと言えるのではないだろうか。

すべてが明らかになってから、ラッセル令夫人はこのように素直に自分の過ちを認める。

There was nothing less for Lady Russell to do, than to admit that she had been pretty completely wrong,

and to take up a new set of opinions and of hopes. (200)

令夫人は自分の過ちに酷く苦しむのであるが、実は自分の錯誤が果たした役割には気づいていなかった。説得は二人の愛を強めこそすれ、損なうことはなかったのである。説得のゆえにこそ、彼らは逆境に耐えることを学んだのである。

さて、アン・エリオットはラッセル令夫人の説得を本当に受け入れていたのだろうか。令夫人は順を追って、ウェントワース大佐、チャールズ・マスグローヴ、エリオット氏とアンに勧めるべき男性をすべて見誤ってしまった。彼女の観察眼は徐々に鈍ってきている。論理的に考えると、彼女の説得はまったく当を得たものではない。しかしながら、彼女の背後にあるものは、忽せにはできない上流階級の倫理と常識である。上流階級とは、この小説において爵位を帯びた田舎の地主階級のことである。確かに小説中の地主階級に属する人々の大半が墮落し、形骸化した権威に縋って生きている。ただし、小説中で田舎の地主階級の権威と徳義に対し、郷愁にも似た尊崇の念が見て取れることも事実だ。エリオット家は由緒正しい、州長官として3期連続して国会議員を務め、チャールズ二世に准男爵位を授かった名門である。その名門の威徳を受け継いだのは、実はアンの母親なのである。彼女の夫への内助の功は、このように称えられている。

She had humoured, or softened, or concealed his failings, and promoted his real respectability for seventeen years. (10)

この母親の代理たる令夫人の説得を拒絶することは、上流階級の体制そのものを否定してしまうことになるのだ。

アンはラッセル令夫人に説得されたわけでも、説得されなかったわけでもない。むしろ、令夫人の説得の肯定や否定を超えた、高い見地に立つ知恵を学んだのである。令夫人の説諭に従い、上流階級の位置に自分を置いたことは間違いない。しかし、ベンウィック大佐の哀しみ、スミス夫人の不遇等に対峙して、現実の世界に吹き荒ぶ偶然の力の恐ろしさを学んだ。さらに、スミス夫人の持つ、資産に目が眩む人間はごく普通という人間観にも接した。こうしたことを通じて、階級的に低い人たちの生活にも明るくなった。形式と実態、建前と本音、本意と他意、上辺と素顔、明るさと暗さ、富裕と貧困等々の人間生活の織りなす対立相を、アンは階級間を移動することによって学んだ。いわば、彼女は階級の壁を乗り越えることによって、社会に対する自らの知見を深化させていたのである。しかしながら、彼女自身も階級差を超えて働く偶然の力の虜になるのかもしれない。小説の最終部分には、次のような薄気味の悪い言葉が綴られている。

His profession was all that could ever make her friends wish that tenderness less; the dread of future war all that could dim her sunshine. (203)

海軍大佐の夫を戦争で失う可能性も否定はできない。⁽¹⁵⁾ こういう不幸も引き受け、アンは自らの意思に従って、偶然の世界に飛び込む勇気を得たのだ。彼女はラッセル令夫人の説得を乗り越えることによって、心理的に自立した女になったのである。

注

- (1) Lady Russellは知性に欠け、理性を感情より重んじ、Anneを呪縛する人間とする視点はMary Waldron, *Jane Austen and the Fiction of Her Times* (Cambridge: Cambridge UP, 1999) 138-39を参照。
- (2) Austenの他のヒロインが自ら間違いを犯して成長するのに対し、Anneは間違いを強いられてそれを耐える。このパターンの差異については、Laura G. Mooneyham, *Romance, Language and Education in Jane Austen's Novels* (Basingstoke: Macmillan, 1988) 146-75を参照。
- (3) 長子相続制 (primogeniture) の下で、資産階級の娘は同等の経済的地位にある家の長男に嫁ぐことが強く求められた。この件はLawrence Stone, *The Family, Sex and Marriage in England 1500-1800* (Harmondsworth: Penguin, 1979) 72を参照。
- (4) 偶然に左右される人間観を描いたAustenの*Persuasion*は暗い調子を帯びている。この暗さは3番目の兄Henryの破産と自身が病魔に襲われ始めたことが影響しているらしい。この見解はGloria Sybil Gross, " 'Pictures of perfection as you know make me sick and wicked': *Persuasion*," *Modern Critical Views: Jane Austen*, ed. Harold Bloom, New Edition (New York: Infobase Publishing, 2009) 205-18 [206] を参照。
- (5) *Persuasion*は原題が 'The Elliots' であり、もともと姉妹関係を中心に構想されていた。Musgrove家も含めた姉妹関係はGlenda A. Hudson, *Sibling Love and Incest in Jane Austen's Fiction* (Basingstoke: Macmillan, 1992) 91-96を参照。
- (6) Anneを生命力に欠ける女性とする議論はMyra Stokes, *The Language of Jane Austen: A Study of Some Aspects of her Vocabulary* (Basingstoke: Macmillan, 1991) 55-58を参照。
- (7) *Persuasion*における地主階級への侮蔑的扱いはClaudia L. Johnson, *Jane Austen: Women, Politics and the Novel* (Chicago: U of Chicago P, 1988) 144-45に指摘されている。
- (8) Keith C. Odom, *Jane Austen: Rebel of Time and Place* (Arlington: Liberal Arts Press, 1991) 131が指摘するように、Austenの他作品では屋敷、庭、部屋に場面が集中するのに対し、*Persuasion*では主要事件が大きく場所を変えて起こる。この特徴はAnneの学びの社会性を暗示している。
- (9) Anneの特徴は恋人以外の男たちにも興味を持つことである。これも彼女の社会性の興行を示唆している。この件はTara Ghoshal Wallace, *Jane Austen and Narrative Authority* (Basingstoke: St. Martin's, 1995) 102-3を参照。
- (10) 地主と軍人の階級的対立はAlistair M. Duckworth, "Austen's Accommodations," *Critical Essays on Jane Austen*, ed. Laura Mooneyham White (New York: G. K. Hall, 1998) 160-97 [192-93] を参照。
- (11) Anneの義務に対する真摯な姿勢についてはBarbara J. Horwitz, *Jane Austen and the Question of Women's Education* (New York: Peter Lang, 1991) 5-6を参照。
- (12) 労働者が作品中で位置づけを与えられ、プロット展開に寄与しているのは*Persuasion*の特徴である。この点はMary Poovey, *The Proper Lady and the Woman Writer: Ideology as Style in the Works of Mary Wollstonecraft, Mary Shelley, and Jane Austen* (Chicago: U of Chicago P, 1984) 234-35を参照。
- (13) Austenが遺産相続をせず、作家の収入に頼っていたことも、貧困層への同情の裏側にはあったのだろう。この件はDeborah Kaplan, *Jane Austen among Women* (Baltimore: John Hopkins UP, 1992) 128-29を参照。
- (14) この発言を当時のコンダクト・ブックの常識の逆さまといえる解釈はAlison G. Sulloway, *Jane Austen and the Province of Womanhood* (Philadelphia: U of Pennsylvania P, 1989) 182-185を参照。
- (15) Anneが置かれた経済的不安定さはMary Evans, *Jane Austen and the State* (London: Tavistock, 1987) 6-7を参照。